

<金融史パネル>

## 金融業のネットワークの検討：日本の近世から近代を題材に（趣旨）

早稲田大学 鎮目雅人

本パネルでは、社会内部における流動性の提供と信用の供与における銀行の役割について、歴史的な観点から検討したい。具体的には、日本の近世から近代における金融機関と顧客との関係、および金融機関同士の関係を視野に入れ、社会全体として銀行のネットワークがどのように機能してきたかについて、検討を試みる。

Rajan and Zingales(1998)は、金融市場が未発達で契約の履行可能性に問題がある資本主義的発展の初期段階においては、金融機関と顧客の長期的な関係を軸とするリレーションシップ・バンキングが有効に機能する一方、金融市場が発達し市場を通じて効率的な投資を行う環境が整うにつれて、リレーションシップ・バンキングが資源配分を歪め経済成長を阻害する弊害が目立つようになると論じた。Hoshi and Kashyap (2001)は、戦前日本の金融システムは資本市場中心であり、第2次大戦中の金融統制と戦後インフレの收拾過程を経て銀行中心の金融システムへの転換が起こったとしたうえで、21世紀においては再び資本市場中心の金融システムへの回帰が必要となると論じた。もっとも、戦前日本の金融システムが資本市場中心であったのか、それとも銀行中心であったのかについては議論がある(寺西 2006)。また、2000年代以降の日本では、低成長経済下における地域金融機関のビジネスモデルとして、リレーションシップ・バンキングが注目されている。本パネルでは、戦前の金融システムにおいて銀行が果たしていた役割に焦点を当て、日本におけるリレーションシップ・バンキングの考察から出発し、さらに金融機関間のネットワーク構築の試みについても分析することで、現代における地域金融を考えるうえでのひとつの視座を提供したい。

高槻報告では、江戸時代の両替商が大名に対して長期的な取引関係を基礎とする流動性の提供と信用供与を行っていた点に焦点をあて、両者の関係がどのように生起し、展開していったのかを検討する。霧見報告では、近代的な銀行制度が整備された明治～大正期の企業と銀行との関係について、預金銀行化の流れと関連付けながら整理する。鎮目報告では、明治期における金融市場統合に際して、全国的な金融機関間のネットワークが果たした役割について採り上げる。

(参考文献)

寺西重郎「戦前日本の金融システムは銀行中心であったか」『金融研究』第25巻第1号、2006年3月

Takeo Hoshi and Anil K Kashyap (2001), *Corporate Financing and Governance in Japan: the Road to Future*, MIT Press.

Raghuram G. Rajan and Luigi Zingales (1998) "Which Capitalism? Lessons from the East Asian Crisis," *Journal of Applied Corporate Finance*, 11(3), pp.40-48.